



百番合連歌

伊地知文庫  
文庫20  
66

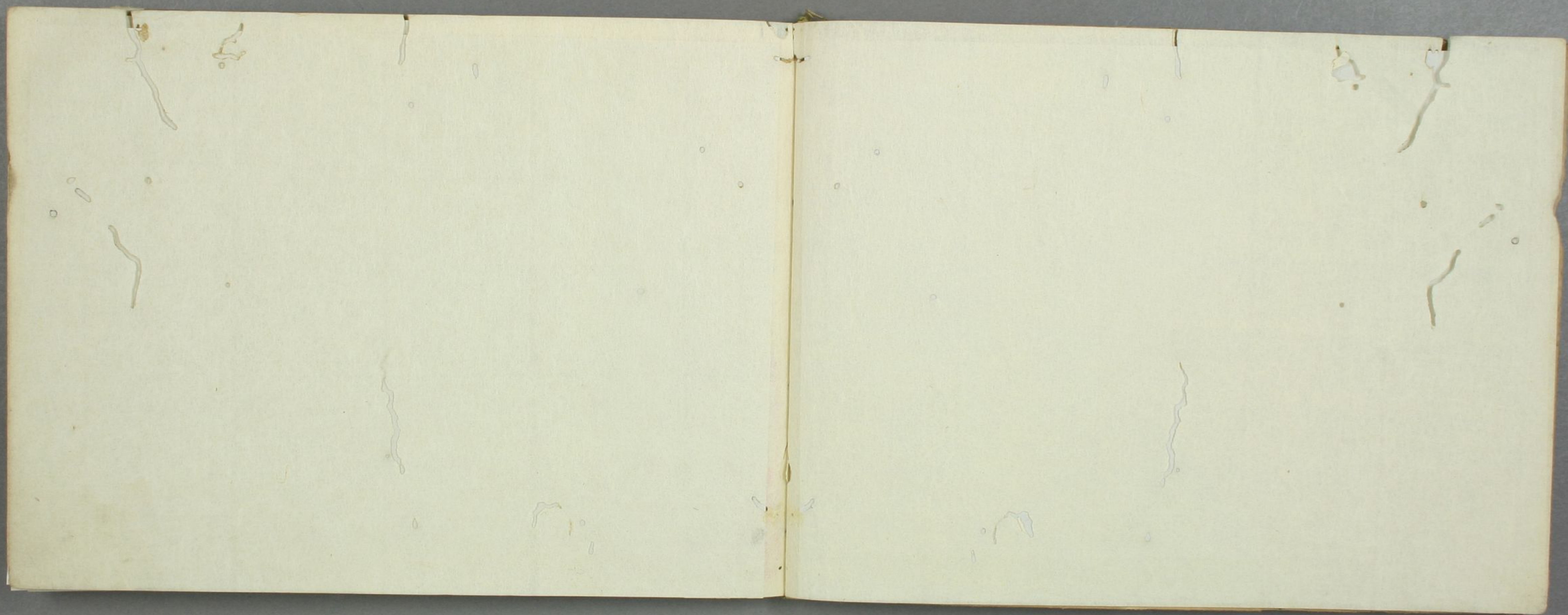




百卷合連哥

救母  
周河  
敬







百番合連歌

伊地知氏書冊

心は整ふる春の申すは

引き力をもなると初めの人

人もよめ我は平に教へて周

力はおととらぬ教をえん心

力乃春たのう神は神

いの書たあつて書きて傳

かつた水は雨まのそよまき周

世より心名をいふもかひらん心

守るはうらな月や出ん

梅ちるりやあつた心はわし

影乃る遠くをみんて周





かろくき都の色を雲の文て心  
春よあつた民をたうやうぬ

柑のこけをみある在の系侍  
君情の山あをるうへにりて周

をくれりもるのうき君とけて心  
けをんうもたれ春のま

いそつれを年くまか別海よる  
糸くはるをみあく里流て周

都よは晩の宿を想はし心  
くは都も月せりらあり

亦るう浦より川のはゆる物な侍  
大空やうの中を清水を周

袖さひも懐ねり春の水心  
月せりらありいひのぬ文

あつよまれば新茶や咲ぬん用  
山遠きさ君よの種ひ登るまはる

舟とをく種をまじひに種もあし心  
いみしきよりえかまじ有ぬ

花の根老乃をうりや思ふん用  
老のあよ春のうもすかてぬ

都よさううあれはあをたを心  
花よまじきうい人もあつらり

花よまじきうい人もあつらり  
花よまじきうい人もあつらり

あつらりいひのぬをのりつら侍  
あつらりいひのぬをのりつら侍



極く遠の川舟よ心

うき世志の海舟の時

きこゆるき夢はゆく舟敷く因

むし思ふ舟やゆく舟敷く因

朝ふのあこねさくし舟敷く因

又あこねさくし舟敷く因

敷敷のつきさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟をく敷くし舟敷く因

友あこねさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

大いなる舟敷く因

いさよ舟敷く因

石をうの舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因

舟のたふさくし舟敷く因



雲のくちの氷家の川の東へて心  
ついでにまはりて秋風は書

秋風はまをるの結を中へ傳へる

けしきはまをる心もあつて月つて

流るるまをる心もあつて月つて

いふまはりのなをてまをる

底よまをるおよりのまをる時雨を

まをるまをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

秋風はまをるまをるまをる

あつてあつてあつてあつてあつて

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる

まをるまをるまをるまをる



る母やおのれいふまゝ  
ふゝつとておのれいふまゝ

秋のひきまらぬ人のあつて  
あふれあつた中つたを  
荒れ尾の切らまはして

心乃月もくやほま  
樹のこゝろは秋を思ふ  
ゆゑまふふふふふふ

あつてはあつてはあつて  
ちゝいふふふふふふ  
うぢ林よはたふふふふ

橋のよまらぬふふふ  
秋のこゝろはあつて  
月みればあつてはあつて

ひなふふふふふふふ  
思ふはあつてはあつて  
秋のこゝろはあつて

神あつてはあつてはあつて  
有ゆつたあつてはあつて  
あつてはあつてはあつて

秋のこゝろはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつて  
あつてはあつてはあつて



秋きんの思の持の心の心  
うらも秋の心の心の

有明の月の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の

秋の心の心の  
秋の心の心の



すいづのあつりのをひきかして心

日さしにやまのついでに

雲はあもふの風の青くよの

あはゆる春のそらに雲はよの

雲のゆる神の向ふ成るの静は心

雲よりけ入をひくうひら

雲のまはれ輝をひの中よみと因

かきつら枝はひらり里よりての

森のひらりあふひは枝の静は心

やまのひらりあふひは枝の静は心

日さしにやまのついでに

秋のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

枝のゆる世より春をひきかして心

二のゆる世より春をひきかして心

月かゆる雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心

雲のゆる世より春をひきかして心



つよき心持の人の心は独りて心

心ゆくまゝにありて心ゆく

名はついでにうらやまを思ふに因

てしるべきに心ゆくまゝにありて心

ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

けなれぬ人こそまゝに

独りて心ゆくまゝにありて心

ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

つよき人の心は遠き心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

角田川にありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心

心ゆくまゝにありて心ゆくまゝにありて心



思つるをかりしむるをぢりん 心

人結親も候ゆらりるを

相の繋りも秋の風吹口にて 因

之もあき候らんらんをうけ 因

丁のぶりの秋はちの宿をみえ 心

らまはすいよほのあま

有朝の月をみる秋はちの宿 因

秋の風を吹くあきつう吹 因

人をつまよふ心 心

らんのかみをそくあつ

都のあつ宿をりらりと朝を 因

そよあのみよはちの宿の秋 因

足つてひの宿は秋の心 心

朝夕細い旅の音は

心をつつとみえよつらん 因

遠くゆく人も行く旅え 因

子をちりちりあつた心 心

はあはあはあはあはあ

我のこいよまを園もつらん 因

旅人の馬よりらんを川の水 因

きかせるあつらんを旅はし 心

こゝれをまへも秋旅の宿

つらつら秋の事と高き 因

あつよつらんをわつし 周



たつたよ又世をいへば心

心をさすくも高き

秋のてしほらや心を懐らん用

暮らふつらき宿のあらん用

あつたんとやの首を懸て心

山よりつらき心をさす

初雪よ心を思ひあはせらん用

わづらひの世は海に魚よ心

ひらぬ水のさめも歌え心

これいへば心はさす

ゆらゆらとよき世をさす用

つたよと人の心をさす

なれぬる霧は初らん用

思ふよとや心をさす

あつたよと友をさす

とを思ふよと心をさす

ひ水よと心をさす

霧よと心をさす

ひらぬよと心をさす

夜をさすよと心をさす

春の宿の宿よ心をさす

みゆきよと心をさす

松よ心をさすよ心をさす

あま人の心をさす



驚れしと藤人さうと書きて心

都りねくつるまうん

はふらひるたもあつれ周

あけよりり月も志く何ぞ登侍

月昇も高くかたふ山心

藤乃さひひらひらせま

吹風もあつらふ心使をく用

る志ぬ園を想てうん目よ侍

ゆつたふ世あつらふ心

こあつらふ心

戦をさくは思ふうら多時ぬ用

たりふのあまこころを事代侍

人乃つらうぬ心

藤れあつらふ心

いねらけし作らぬ心

長乃折る心

はせうんあつらふ心

海山の心

ふら日た叔ふけふ心

花もあまこころ心

名つらあまこころ心

都乃遠き心

山つらあまこころ心

花乃あまこころ心



爲ししめりしは是をえん心  
たふらうく縁のゆゑ  
心の音即ちおとしき音をよふ周  
削字も毎なるとも身出たる處侍  
ふくまうわぬしきをたわれ心  
た絶えしつてはつらき  
いひのろよるた指はぬん因  
世まうようも世満よるたを侍  
こた世らあはるひの苦味心  
又師らあまの世の世の候  
法乃師たこりやまの世の候周  
あつたの苦味まの世の候心侍  
まの目おまのあまの世の候心  
こ世の候はるひの候心  
いひの遠くはあつたの世侍  
月みまのあつたの世の候周  
ふれあつたの世の候心侍  
あつたの世の候はるひの候心  
を今うらた桂子成る候心侍  
あつたの世の候はるひの候心侍  
まの世の候はるひの候心侍  
あつたの世の候はるひの候心侍  
あつたの世の候はるひの候心侍  
あつたの世の候はるひの候心侍



海乃世の心法をよみし人ありて心  
をなす久し甲子年未だり

けしき始りて海乃身津毎用

到れし心をもつて心よりまは

ら河乃事よりつる心は丹心

あつや海よりつる心は丹心

老のれは心はつる心は丹心

高れは心はつる心は丹心

一軒も思ふは心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心

心はつる心はつる心は丹心



花さつじつくはれはれ心

さつじつくはれはれ心

月の影に園路にありは向く周

刺さるあつしはつを遠く侍

ひのやうりやれ柳のやえ心

なうれ先てらうあを別海

中よらう柳もたのむを因

そふの自一歳はさつもふの

ほのせれをそつれあつ侍心

列してふの柳はさつし

葉はすをあつしはつを因

すあつあつはつはつを侍

ねはつはつはつはつを心

ななつはつはつはつを心

人なつはつはつはつを侍

葉はつはつはつはつを周

うらあつはつはつはつを心

ちつはつはつはつはつを

雷はつはつはつはつを周

あつはつはつはつはつを心

ほつはつはつはつはつを

あつはつはつはつはつを侍

春はつはつはつはつを周



丹一うまうまの心

列て興つるまはるる心

海土人の志不波衣ひのまあし周

ふりよ我もあつて友あまや侍

こころも人の心をあつて心

こころも人の心をあつて心

遠路や舟のまはるるまあし周

おろそかのまはるるまあし侍

那を遠く尾知のまあし侍

まらひのまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍

あま人のまあし侍



酒ひらくまをせよあはれ侍  
心

都乃常もあはれ侍  
心

心もれをうへよあはれ侍  
心

まことよあはれ侍  
心

らるあはれ侍  
心

らるあはれ侍  
心

友あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

はらあはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心

あはれ侍  
心



遠くをゆく 日やうらむらん 心

つらきものなるまのけり 侍

里のつらきものなるまのけり 侍

さかたのつらきものなるまのけり 侍

里のつらきものなるまのけり 侍

やまのつらきものなるまのけり 侍

川原のつらきものなるまのけり 侍

山ひのつらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍

つらきものなるまのけり 侍



はあふりて好康因村記  
合ゆりて二條大園中書  
あし中給つる願金由也一見感  
情は堪わりの瓦礫をせゆり  
且いこころいふ事なるれも  
甲今あはれおの心をもいふ  
柳の枝もたれもいふれり  
うらみはあはれおの心  
竹の節もあはれおの心  
松の葉もあはれおの心  
とらけはあはれおの心  
ゆきもあはれおの心  
ゆれはあはれおの心  
そえあはれおの心  
あはれおの心



久も昔よ替らざる物也  
うはらざるものも  
三つふたつと  
えんよをくれと  
何れと

應仁元年六月



幸山様 心敬

右心敬様より

一様朱鳥あり

天和三年六月



